

## みんなが喜ぶ家づくりを目指す 木の家専門の工務店

株式会社 木の家専門店 谷口工務店

滋賀県蒲生郡竜王町山之上3433  
従業員数：100人

琵琶湖の南東、滋賀県中南部に竜王町という町がある。たにくちひろかず谷口弘和さんは1972年にこの町で生まれた。父、三郎氏は大工の棟梁で、この町の戸建て住宅の多くは父、三郎氏の仕事だった。40年前に名神高速のインターチェンジができてから、町は工業化、都会化がすすんだが、それ以前のこの町の多くは米づくり農家で、1人前になるとまず家を建てて、そこへお嫁さんを迎えるという風習があった。三郎氏は未婚の跡取り息子のいるお宅を捜して営業に歩いた。お客様から結婚後の生活プランを聞き、それに基づいて図面を引き、同じ町内の大工仲間たちの協力を得て家を建てた。仕事一筋の寡黙な人だったが、お客様からも大工仲間からも信頼は厚かった。その父のようになりたいと思って、谷口さんは彦根の工業高校の建築科にすすみ、卒業後は先生の勧めに従って、大手ハウスメーカーに就職した。

### ■大手ハウスメーカーの仕事

大手メーカーの家づくりは、父のそれと



谷口弘和社長

はかなり違っていった。建築部材はすべて規格化され、大量生産によってコストダウンが図られ、営業、設計、施工の各担当者は完全に分業化されていた。お客様との折衝はすべて営業担当が引き受け、設計担当も施工担当もお客様と言葉を交わす機会はほとんどなかった。本来は千差万別であるはずのお客様の要望は、あらかじめ用意されたメニューのいずれかに当てはめて、そのメニューどおりに家をつくる。規格化、分業化によって効率化を推し進め、まるでベルトコンベアで大量生産するような家づく

りの手法を追求することで、大手ハウスメーカーは、高度成長期の膨大な住宅需要をこなしてきた。

谷口さんはその工事部門で3年間経験を積んだ。しかし、自分の想像していた家づくりとはまるで違う。もっとお客様に寄り添った、父のような家づくりをしたい。そう思って「独立させてください」と上司に打ち明けた。「3年で独立？ 100年早いよ！」と上司はあきれながら、「独立したければ、腕を見せろ」とも言った。

その言葉のとおり、その後1年間、谷口さんは仲間の支援なしに1人で家を建て続けた。それが認められ、1995年、22歳で、この大手ハウスメーカーの下請けとして独立を果たした。社員が独立して下請けになるのは、この会社でははじめてのことだった。父、三郎氏ゆずりの丁寧な仕事ぶりはお客様から高く評価され、お客様アンケートの評価ランキングで関西ナンバー1になった。

それでも、分業化された家づくりの一部分だけを引き受けることに、ずっと違和感があった。自分でお客様と折衝することもなく、自分で図面を引くこともない。すでに決まったお客様のために、決まった図面どおりに、決まった建材を、決まったとおりに組み立てる毎日。そのようにしてたくさんの家を建て、数をこなしたことが評価される。これでは機械の歯車と同じだ。下請けを卒業して元請けとして仕事をしたい



谷口工務店本社

…との思いが次第に大きくなっていった。

## ■ハウスメーカーのからの独立

バブル経済が崩壊し、その後の経済停滞が誰の目にも明らかになってきた時期だった。少子高齢化がすすみ、人口は都市に集中し、地方では空き家が目立つようになり、新たに家を建てる人がめっきり少なくなった。

あるとき、銀行から警告を受けた。父、三郎氏が建材代金の支払いのために振り出した約束手形を落とすことができず、連帯保証人の谷口さんに銀行がそのことを通告してきたのである。三郎氏の仕事も大幅に減っていて、それにもかかわらず、父は見えないところにまで良質の素材にこだわり、見積り以上の高い材料を買って、手形を落とせなくなったのだった。

このままではやがて行き詰まる。家づくりはこれからもっと厳しくなっていく。つくり手本位の家づくりの一部分を引き受けるだけではジリ貧になる。もっと広い範囲のお客様を自分の力で開拓して、棟梁だっ

た三郎氏がそうだったように、そのお客様と向き合い、お客様の要望にぴったり沿いながら家をつくっていかない限り生き残れない。お客様に喜んでいただくだけでなく、谷口さん自身も、設計者・大工・納入事業者・基礎屋・屋根屋などの協力事業者も、みんなが喜ぶ家づくりを目指さない限り、将来はない。

そう心を決めて、大手ハウスメーカーの本社まで足を運んだ。「家業を継ぐことになりましたので…」と事情を話して、下請契約に終止符を打った。そして、あらためて「谷口工務店」の看板を掲げた。2002年、30歳のときのことである。

## ■みんなが喜ぶ家づくり

「みんなが喜ぶ家づくり」はどうしたら可能になるか。谷口さんはむさぼるように経営書を読み、さまざまな経営者の勉強会に参加し、これという経営者には直接会いに行き、行って教を請うた。

そして、あるボランティアチェーンに参加した。「FP工法」というウレタン製の断熱パネルを使うことで高气密、高断熱の家をつくる工法の普及を目指しているグループで、その工法とマーケティングのノウハウを教わり、自分で手書きのPRチラシを作製し、輪転機を回して印刷し、新聞販売店に持ち込んで新聞に折り込んでもらった。1軒1軒チャイムを鳴らして配ったり、地域の夏祭りに参加してチラシを配つ

たこともあった。「みんなが喜ぶ家づくりを目指しています」と発信し、目の前のお客様に誠心誠意説き続ければ、思いはやがて通じる、という、ある本で読んだ営業ノウハウを忠実に実践し続けた。

そんな中から、谷口さんの人柄を見込んで、「ぜひあなたに家を建ててほしい」という老夫婦が現れ、家1軒を建てるために、2000万円を出してくれた。その老夫婦に喜んでもらえるようにと、一生懸命に仕事をしたことが評価され、その知り合いからも仕事をもらえることになった。

## ■新卒を採用する

こうした営業活動が実って、少しずつ注文が入ってくるようになった。売上げが5億円を超えたとき、協力事業者に頼るだけでは仕事が回らなくなり、思い切って人を採用することにした。学歴・経験不問で大工を募集し、できれば経験を積ませ、やがては建築士の資格を取得させたいと考えた。しかし、集まったのは、特段の特技もなく、パソコンもできず、これからはじめようとする仕事に対して、十分に気持ちを傾けているとは思えない人ばかりで、せっかく採用を決めてもほとんどが長く続かなかった。

医者が人の命を守るのと同じように、家づくりは、そこに住む人の命を守る。生活を守り、くつろぎと快適な空間を提供する。そういう家をつくることに、使命感や

プライドを持ってもらえる人を集めたかった。純粋な気持ちでそう思ってもらえるのは、これから世の中に出ていこうとする新卒だろう。そう考えて、2004年から新卒採用に取り組んだ。

就職フェアに参加して、ブースを出した。大手ハウスメーカーのブースはいつも黒山の人だかりだったが、谷口工務店のブースに立ち寄ってくれる学生はほとんどなく、何度も屈辱感を味わったが、やがて、大手にはない「みんなが喜ぶ家づくり」に共感してくれる学生が、少しずつ入ってきてくれるようになった。

大工として入った者も、設計士として入った者も、みんなでお客様に向き合い、施工過程を理解し、お客様に喜んでもらえる質の高い家づくりの技術を高めることを目指している。

## ■建築家、伊礼智氏との出会い

「みんなが喜ぶ家づくり」をすすめるには、「よい家」のイメージを高めていかねばならない。毎日の仕事に追われ、日常的、平均的な意識の中で過ごしていると、イメージは陳腐化する。「よい家」を生み出すには、日々努力して「優れたもの」「よいもの」を求め続けなければならない。

あるとき、社員の1人が伊礼<sup>いれいさとし</sup>智さんという建築家のブログを見ているのを知って、谷口さんはその建築家とその作品に関心を持ち、ある日思い切って、その人に会

いに行った。モデルハウスを見せてもらったとき、雷に打たれたように感じた。これこそ自分がつくりたかった家だと思った。

「優れた設計者は、お客様から言われたとおり設計するだけではありません。お客様はほとんどの場合、家づくりの素人で、詳しい知識があるわけではない。すべての希望を叶えようとする、かえって住みにくい家になったり、コストが高くてついたりする。設計者は御用聞きではなく、お客様の本当の思いを汲み取ったうえで、ベストの提案をする提案者でなければならないのです」と伊礼氏は言う。

それを機に、谷口さんは伊礼氏に、自宅と本社屋兼モデルルームの設計を依頼した。そのとき以来、それらが谷口工務店の設計担当社員たちのお手本となり、そこから無数のヒントをもらいながら、家づくりをすすめるようになった。

## ■大津百町スタジオとホテル講

竜王町の範囲を超え、より広い範囲のお客様に対応するために、大津、大阪堺、東京表参道に支店を置いた。

滋賀県の県庁所在地、大津市は、かつて東海道五十三次の宿場町として賑わったまちだが、近年は市街地にも空き家が目立つようになっていた。2016年にオープンした谷口工務店の大津支店は、市街地の町並保存という地域の方針に沿って大津駅前の築90年の古民家を改修したもので、ショール



大津百町スタジオ

ーム「大津百町スタジオ」としてオープンし、谷口工務店の大津支店としての役割も兼ねている。

2018年には、大津市街のアーケード街で築100年の由緒ある町屋を取り壊すという話が持ち上がった。その話を聞いた谷口さんは、「里山十帖」という体験型宿泊施設を運営している(株)自遊人の経営者、岩佐十良<sup>いわさとおる</sup>氏のことを思い出した。

この人とタッグを組み、谷口工務店がこの町屋を改修し、運営を岩佐氏に委ねれば、これらの町屋をホテルとして蘇らせることができるのではないかと考えた。谷口さんの思いはやがて実を結び、「近江屋」「茶屋」「鍵屋」「丸屋」「萬屋」「鈴屋」「糶屋」という7棟で構成されるホテル「講・大津百町」が完成。新感覚のホテルとして人気を集めている。

## ■木の家設計グランプリ

日本建築のすばらしさを再発見し、さらに高めていくことを目指して、谷口工務店では伊礼智さんほか何人か建築家の協力を



ホテル講・大津百町

得て、2014年から「木の家設計グランプリ」を開催している。建築学科に学ぶ学生の多くは大手ハウスメーカーを目指すが、伝統的な木の家<sup>きのいえ</sup>のすばらしさをもっと見直してほしい…という思いからはじめたもので、建築学科のある全国の大学、専門学校、高校の学生を対象に、設計図と模型写真、プレゼンテーション動画での参加を募り、作品審査で上位に入賞した人たちを審査員が面接して各賞を決定。賞状と賞金を贈呈している。7年目の2020年度「木の家設計グランプリ」には436人が応募した。建築関連会社、新聞社、建築家養成学校…など数十の会社団体の協賛を得て、資金援助してもらっている。

谷口さんが卒園した地域の幼稚園、竜王幼稚園から建物の補修を依頼されたことがあった。先方の予算が十分ではなく、谷口さんの母校であったことから、ボランティアで補修しましょう、ということになり、以後、毎年そのボランティアを続けている。さらに、地域の美化計画に賛同して「大津百町スタジオ」やホテル「講・大津

百町」などをつくってきたことが、評価され、滋賀県から「滋賀CSR経営大賞・ベストプラクティス賞」を受賞したこともある。木の家のすばらしさを伝え、みんなが喜ぶ家をつくりたいという谷口さんの思いは、少しずつ着実に広がりはじめている。



「木の家設計グランプリ」審査風景

※本稿の執筆に当たっては次の図書を参考にしました。『100年安心できる！「いい家」の建て方』（谷口弘和著，ぱる出版，2016）／『マンガ・谷口工務店物語 1・2』（谷口工務店刊）

取材・執筆 山口 幸正（やまぐち ゆきまさ）

《プロフィール》

外資系食品製造業人事部勤務の後，産業教材出版業勤務。全国提案実績調査を担当し，改善提案教育誌を創刊。1985年に独立し創意社を設立，『絵で見る創意くふう事典』『提案制度の現状と今後の動向』『提案力を10倍アップする発想法演習』『提案審査表彰基準集』『改善審査表彰基準集』『オフィス改善事例集』などの独自教材を編集出版。40年にわたって企業・団体の改善活動取材。現在はフリーライター。

●創意社ホームページ <http://www.souisha.com> 「絵で見る創意くふう事典」をネット公開中